

109

83

池上長榮山本門寺誌

019899-000-4

109-83

池上長榮山本門寺誌

富永 潮澍 / 編

M29.10

ABH-0006



109

83

池上長榮山本門寺誌

109

83

池上長榮山本門寺誌 一全

題字

從一位公爵 九條道孝君

從二位伯爵 勝安房君

正四位文學博士 重野安繹君

正四位關 義臣君

序文

權僧 正守本文靜上人

東京圖書館

一	八		一	
	三		九	
冊	號	架	函	類門



沙門中法持寫



常樂



戒
淨

照治丙申季春

紫鳳



宗
則
基



宗則基

源

丙午秋

少舟



此日



歸

妙法

丙申春仲

成齋書



敵



文

氣於

浩滿

正四位源義臣題



見本門寺者天下多知本門寺者
者下少源清法師著之誌上
持中者余認自今而後知本門
寺者如文字見本門寺者或字
是後廣宣流布之因緣也於

丙申仲夏 和休近初歛

池上長榮山本門寺

凡例

- 一本誌は本門寺舊記同紺表紙江戸砂子江戸名勝圖繪東京名勝畫詞其他の記録に依て撰キ
- 一本誌の編次は祖師堂を以て中心とし其餘諸堂樓閣及び之を回環する本院及闔山の坊舎等に關する由緒を記キ
- 一本誌に貫顯摺紳姓名の傍に其爵位を掲載せざるは専ら風雅を主とせるを以てなり敢て恭敬の意を失ふにあら
- 一本誌記事中特に著者なるものは其下に圖を添へ覽者の便に供キ
- 一本誌は世人の口碑に膾炙して傳稱の久しきものは強ちに添刪せし姑らく其儘を載たり
- 一編中文字編者固より校合に怠らせずと雖も猶を遺漏あらんことを恐る覽者其の誤謬と示し賜は々幸甚

編者識

池上長榮山本門寺誌

第一項

富永潮澍編纂

池上本門寺畧縁起



抑も當山の由来を尋るに人皇八十九代
 龜山天皇の御宇鎌倉五代の將軍惟康親王の臣池上右衛門太夫宗仲と
 いへる者偶々高祖の行化に浴し我采邑池上を捧けて建立せし法華の
 道場にして開堂式は正しく文永十一年十一月にして長榮山本門寺の
 號は高祖自ら命ぞる所の者あり高祖身延山に在て幽棲九年讀誦
 說法教化大に興ると雖も一朝所思有て事を楹原湯治に托して彼の地
 を發し同月十八日池上へ着し翌日波木井氏へ永訣の書を贈り其後從
 容として宗仲に言て曰く往昔釋尊は靈山より良なる跋提河の邊り工
 匠純陀が家に於て滅を取られたまふと今や日蓮を其轍を踐み身延山の

良なる玉川の濱工匠宗仲の邸に死せんとそ幸ふ我が爲めに柩を作れ
 と宗仲泣て答て曰く嗟師を釋尊に比するは當れり我を以て純陀に擬
 するは未だしと夫より弟子檀那を集め九月廿五日安國論を講じ十月
 八日六老僧を定め且つ平生身ふ隨ひ玉へる所の立像の釋迦牟尼佛安
 國論赦免狀等を上足日朗上人へ讓與して付法の信聖とそ且つ池上本
 門寺へ鎌倉比企谷妙本寺を併せて同く朗師へ付囑したまふ朗師兩山
 を兼職すること大凡三十七年終に比企谷に在て入滅したまふ故に今
 に至る迄其古例に依りて本門寺妙本寺兩山一主とし法燈を紹繼せり
 此比企谷妙本寺は當時の鴻儒比企大學三郎能本なるもの高祖の教
 化に服し法華を信し終に已が宅を捨て寺と爲せし者にして開堂供養
 は文永十一年四月朔日にして實に我宗最初の靈場あり統紀に所謂一
 閻浮提本化最初の法窟ありと謂へるにても知るべし六百年來藏する

所の靈寶殿門堂閣起立の由來及び天子將軍諸侯伯へ由緒格式等の如
 きは別記に讓る

第二一頂

歷祖系圖

高祖日蓮大士

- 二代 朗
- 三代 輪
- 四代 山
- 五代 叡
- 六代 行
- 七代 壽
- 八代 調
- 九代 純
- 十代 陽
- 十一代 現
- 十二代 惺
- 十三代 尊
- 十四代 詔
- 十五日 友
- 十六代 遠
- 十七代 東
- 十八代 耀
- 十九代 豊
- 二十代 通
- 廿一代 類
- 廿二代 玄
- 廿三代 潤
- 廿四代 等
- 廿五代 頷
- 廿六代 芳
- 廿七代 章
- 廿八代 侃
- 廿九代 顯
- 三十代 利
- 卅一代 廣
- 卅二代 繼
- 卅三代 謙
- 卅四代 洪
- 卅五代 統
- 卅六代 勢
- 卅七代 觀
- 卅八代 棟
- 卅九代 憲
- 四十代 性
- 四十一代 洋
- 四十二代 讓
- 四十三代 攝
- 四十四代 戒
- 四十五代 意
- 四十六代 詳
- 四十七代 教
- 四十八代 萬
- 四十九代 暉

五十代 五十一代 五十二代 五十三代 五十四代 五十五代 五十六代 五十七代

日修 日鄰 日遵 日正 日英 日操 日官 日傳

五十八代 五十九代 六十代 六十一代 六十二代 六十三代 六十四代 六十五代

日雷 日傳 日運 日大 日昇 日軌 日振 日薩

六十六代 日舜

第三項

由緒

當寺は 宗祖日蓮大菩薩終焉の靈跡にして往古大國院と號す大國院は
なり二祖の譲り 人皇八十九代 龜山天皇御宇鎌倉將軍惟康親王の臣池
上右衛門太夫宗仲 宗祖の高徳に歸依し其采邑を捧けて文永十一年
十一月宗仲自ら本化の道場を建立せん事を欲して 宗祖に白そ 宗
祖其の志を嘉して長榮山本門寺の號を與へ且つ大曼陀羅を圖して授
け玉ふ現今の境内外六万九千三百八十餘坪は宗仲の寄附する所なり

十二代日愷上人は二條關白昭實公の猶子にして天正年間參内を命ぜ
られ紫衣の勅許あり且つ徳川家康公の歸依を受け慶長三年二月廿四
日寺領として百石の朱印を付せらる代々の將軍以て例とあそ又特旨
を以て府内に末寺六ヶ寺の新設を許さる二代將軍秀忠公亦た當山に
歸依し其乳母の爲めに山門及五重塔を建立し今猶現存せり當時肥後
國主加藤清正公篤く本化の教義を信して慶長年間自ら木材及費用を
附して四十間四面の祖師堂を建立し以て大堂と稱す日本三大堂の一
後寶永七年十月祝融の災に罹り山門及五重塔を除くの外堂宇悉く烏
有に歸せしが廿四代日等廿五代日鏡の兩師徳川八代將軍吉宗公の寄
附を得て現今の釋迦堂祖師堂等を再建す日等上人は伏見親王の猶子
にして特に參内を命せられ是より永代紫衣の勅許を受け爾來幕府登
城の節は乘輿獨々禮白書院關内二疊目の禮席に列なれり之より本門



楊舟堂印

寺住職更代の節は代々伏見親王の猶子となり幕府白書院御老中列座の前にて住職拜命なし即時紫衣を着用して退出し御禮登城の節は城内頭巾携杖御免を例とせ又徳川八代將軍吉宗公は御母深徳院殿を富山に葬り爾來年々米六百俵つゝを慶應三年迄寄附せられたり明治元年四月一日征東先鋒總督橋本少將副總督柳原侍從の旅館に充てられ十三日迄滞在同十三日大總督有栖川親王殿下の御旅館を命せらる明治維新に至り年禮拜賀として毎年參内せしが明治十八年拜賀の禮止む其他華胃名族縉紳の歸依等記る所に違わらず當寺境内は荏原郡内丘陵の最南端に位し高き直立五丈餘周圍數十町森林蒼鬱として風致秀拔なり 實に葦藪の下に於ける最勝の名區と云ふべし

第四項

画詞

池上松壽齋十景

山上靈槍

本土封疆法界寬。儼然未散久成壇。法身非滅却垂滅。四處塔中入涅槃。

海東旭日

破闇導生東海。賜識明我祖出神疆。建長資始今猶見。末法萬年不滅光。

森浦歸帆

森浦渺茫萬里程。風帆幾許逐波行。衆藩通貢太平象。日夜乾坤不替晴。

蒲田落雁

遠逐惠風萬里翔。旅情相慰會親明。蒲田併案中牟地。俱入睡鄉夢亦長。

宿鷺白雪

百千白鷺擁巢來。枝上群居水作態。淡々斜陽相映潔。青山一半雲堆々。

蔓藤紫雲

瓔珞垂天光十分。久成報土聖爲群。迹門惑者詎能識。樹上有時見紫雲。

函谷楓關

函谷栽楓々々作關關。關楓曝錦蜀江間。只嫌謗法僞遊客。將樂一乘清淨閑。

硯池荷風

亭々玉筆起香風。取畫曼茶圖樣巧。聚得大千妙機水。將取於是硯池中。

農家暮煙

五々三々籬落連。分疇曳水耨公田。麥肥梁熟農談饒。備老翁誇暮煙。

漏樓時鐘

樓上聲々十二辰。耳根清淨教門新。因思廬嶽蓮花漏。警策衆人欲拂塵。

池上本門寺吊狩野探幽墓 青萍末松謙澄

十
妙技當年稱拔群。如今誰復護遺墳。空林夕日人蹤絕。一朵寒花來吊君。

吊木下順菴先生墓

全

欲薦蘋蘩暗促愁。苔封古碣幾春秋。庭梅不管桑滄變。一任閑人踏月遊。

遊池上本門寺

櫟齋村岡良弼

滿目風光秋爽哉。徐々移杖拾詩材。東西旁午人如織。咸賽蓮公堂下來。

贈池上日薩上人歌

全

君不見大藏八萬浩無邊。教觀幽微深於淵。昔之俊彥猶病諸。况今荒學屬蔓延。薩公天與識見卓。不拘時流事精研。慧日昭々輝觀床。辯河滔々鴻講筵。聲譽德望難稻晦。一朝拜補教導官。吾生久辱方外交。豈聞盛舉可無言。君不見教則三條國家典。輔政資化依之全。又不見弘經三軌如來訓。護法利物依之圓。吁嗟乎加以公之德與爵。教導得宜攝群緣。名聲隆々豈足期。企望皇威輝三千大千。

題蓮祖像天兵破虜有感

碧海內藤耻叟

浪覆胡元十萬兵。風靡八道朝鮮草。於今安國有精神。立正千秋長莫老。

遊池上本門寺丙申春晚

屈山小室重弘

千秋安國論何雄。基業堂々仰祖功。劔折青天飛霹靂。幡翻紫海覆鱗鱗。雲霞繡出淨光界。金碧裝成妙法宮。歡喜我來春晚節。諸天咫尺雨花中。

第五項 建築物

祖師堂 奥間口十三間

百六拾九坪



祖師堂

正面宮殿の中 高祖日蓮大士の尊像を安置せ
置そ東西の脇座に朗師輪師の像を安置せ
り此の祖師堂の開創は初め文永十一年十
一月池上右衛門太夫志宗仲の勸立せしも
のにして當山第二祖日朗上人躬自ら諸弟
を率ひ殿宇を經營し文保元丁巳年に至て土
木の功全く終り輪奐悉く成る其後加藤清
正公慶長年間土木工費を寄附し良材を精
選し四十間四面の大堂を再建せり寶永七

年十月馬舞の災に襲はれ灰燼とありしが享保八年癸卯八月廿五日當山
廿四祖日等上人徳川八代將軍吉宗公の喜捨を得て現在の祖師堂を建
立せり當山六十五祖日薩上人明治廿年中巨額の費を投し一大修繕を
加へ莊嚴完備し堂宇燦然として人目を射る誰の崇敬の至心を發さ
らんや

因に記す舊時の大堂は清正公が騎馬にて手に鎗を握り堂の椽下を
東西自由に往來せりと又本朝三大堂の一員なりと并寺當山と高野山三
刹皆中堂を云ふ今ふ郷里の口碑に傳へり
高祖日蓮大菩薩靈像 弘安五年十月中老日法上人竊に障子を隔て、
刻みつゝ在りしに 高祖の曰く吾が像を刻むか好し吾目前に於てを
べしと乃ち側にて寸尺を誤たを御頭疵までも一々漏さず寫し奉り猶
を香色の法服へ青き畫具にて唐草を畫けり 高祖見玉ひて實に毫釐

もたがはぬ吾が生身の形ありと仰せられたり 高祖御入滅の後御頭の眞骨を二つに分て一分は此尊像の中に納め一分は身延山へ送りしなり親しく見奉る所なりとぞ又九老僧の起請文を納む其他身延比企谷是れを一木三鉢の靈像と稱そ

因に記す宮殿葵の御紋付の水引斗張は年々幕府より納めらるゝ例あり維新後此例廢せらる武相御召請是を納む將軍御成の時は此尊像を御拜あらせらる又朗師輪師の像の中にも各々御骨を納むと云ふ

格天井花鳥之圖寶殿襖之畫 法眼如川周信筆

欄間天人之圖 曉雲齋山本義信筆

額 太虛庵光悦の筆ありしが寶永七年火災の爲に燒失し後造りたるものにして誰れの筆あるを詳にせま

額聯 當山六十世日蓮上人の筆

日蓮東方宗長持九分之手

と時を涵禪月恒涵三教之水



御供所 明治廿一年當山六十六祖日蓮上人の代再築せり全所おは立像の釋尊日蓮上人の像を安置す

釋迦堂 間口十一間 百拾坪

本尊は本門の教主釋迦牟尼佛上行等の四菩薩持國等の四天王を安置

本堂



此一尊四菩薩四天王等の像は俱に運慶の作なり開祖以來の堂は永正年間に焼失し其後再建せしが寶永七年十月亦復焼失す當山廿五祖日顯上人の代徳川八代將軍吉宗公御母深徳院殿追福の爲に建立せしものふて其落成は享保十五年九月十五日あり

書天井雲龍之画 狩野隆信筆

十二神之像 本尊の脇別座に勸請せり

釋王殿の額 伏見親王の眞跡なり

額聯 六牙潮師の筆

一聖四賢法恩陽儼然在空會道場

安國輪流雙樹地子枝萬葉永は芳



本堂額

輪藏 間口六間 三十六坪

釋迦堂の背にあり一切經及傳大士普成普建の像を安置せ昔の經藏は寶永七年焼失す享保二年當山廿四祖日等上人の代水戸中納言網條卿の建立なり一切經は中川佐渡守の室長壽院殿の寄附するものなり今

輪藏



清正堂 間口四間 奥行三間 十二坪

釋迦堂の前まへにあり加藤清正公かとうせいせいこうの像えいぞうを安置あんちす文政四年ぶんせいしよんねん當山あたやま四十五祖しよじよごそ日ひ意上人いしやうじんの代之たひこれを建立こんりよせり又像またえいぞうの脇わきに公こうの位碑ゐいはいを置かけり堂どうの右みぎに公こうの墓誌ぼしあり所ところ委まかすは墳墓ふんぼの

の一切いっさい經きやうは松平まつだいら讚岐守さんし室永昌院むいしやうゐん殿でんの寄附きよつけする所ところなり經藏きやうざう建立こんりよ本願主ほんがんしゆは松平周防守まつだいらしゆぼうしゆ室淨心院むいじやうしんゐん殿でん松平播磨守まつだいらはまのり室遠紹院むいえん殿でんあり

鐘樓堂



鐘樓堂 間口四間 奥行三間 十二坪

清正堂せいせいどうの左方ひだりにあり鐘かねを撞つき時ときを報はらじて怠おこたらず當山あたやま廿三祖にじよさんそ日ひ潤上人じゆんしやうじん正徳四年せいとくしよんねん五月ごがつ改鑄かいかうせり鐘かねの大おほさ徑たてま五尺ごしゃく五寸ごすん二分ふふ厚あつさ七寸しちすん八分はふぶんなり先まへの鐘かねは日東上人にっとうしやうじんの作しやくりる所ところなり遠師えんしの銘めいあり

鐘銘並序

原夫當山開基之始者弘安五年季秋十月八日宗祖大士來自身延山相攸於斯地而縛茅自居焉其志欲示滅於此也故躬親定寺山之号宣暢三大秘法之深義講談立正安國矣

付闕於上足日朗薩埵終唱滅度此上焉朗菩薩嗣法而秉化權之靈蹤而甲宗門塵刹矣故緇素繼踵栽善種於這福田貴賤委身拔罪根於此道場也茲殿堂門廡僧房寶塔大都叢林所宜有悉具輪奐棄目也雖然梵鐘製微而

美未盡焉爰前肥後守加藤清正息紀亞相賴宣卿室法評瑤林院殿清秀日
芳大姊棄舍若干淨財令住持日東新鑄鎔洪鐘焉於此蒲牢一叫山鳴谷應
遠勸近徵而善美並盡焉允鐘為利經典所載不必待予舌頭顯開六時之迷
冥救群生之苦其福詎得量乎伏乞三寶證明諸天衛護而鐘聲永與乾坤不
盡焉銘曰

鴻鐘清韻 聲遍大千 六時普告 覺長夜眠 集僧羯磨

念誦安禪 勸俗生信 觀無常緣 百八徹耳 轉識寂然

說聽熏意 但開心蓮 上天魔 下救懸倒 銅鐘盛德

不變蒼天 兩山十六世前住心性院日遠謹誌

粵兩山十七世日東聖人鑄鎔鴻鐘掛著當峯自余 春秋鯨音終啞也鳴

呼禪誦之起一齊粥之早晚送迎之緩急皆失節矣日潤思之不止重巨願結

操 鍛鍊頑銅以正德四龍集^甲五月四日荳改作之矣雖然豈亡於先代

之功乎因而序銘共彫用於舊作也夫以鐘之為德也其聲大而遠以是過去
求法現在說法滅後集法皆莫不推鐘而告四方矣故無量之佛事自是聲中
也以爰蒲牢一鳴降伏衆魔消除諸罪焉且又從正德四歲五月十九日且六
月三日勤於供養之法儀余則以箇鐘並法養之功德寧佛法繁昌廣宣流布
天下泰平國土豐饒兩山永盛願望成就乎兼又求索於天真院殿妙仁日雅
大姊寬德院玄真日中大姊芳心院殿妙英日春大姊圓光院殿日仙榮壽大
姊之增道者也乃至助力之四衆與法界群生都二世之志願圓滿成辦矣伏
乞鐘壽長保超千千秋妙音久告過千萬歲焉 維時正德第四歲在甲午五
月吉祥日

長興長榮兩山廿三之嗣法

慈雲院日潤營之箋之

紀州粉川住御鑄物師木村將監

題目堂 奥行二間半 十四坪

鐘樓脇山門の西にあり日朝上人を安置す眼病者參詣祈念して靈應を受くるもの尠なからそ近在結社の信徒日々此堂へ參集して常に本門の首題を唱へて怠慢を止し當山廿二祖日玄上人元録年中之を創立を寛保年中加藤甲斐守納泰君淨財を捨て常唱院の資とす

額常題目堂 元録二年己三月吉旦東陽處士大角圓順書壽毫庵とあり

樓門 奥行四間 三十六坪

石階の上祖師堂の前にあり左右に二王の像を鎮座せり今を距ること殆んど一千二百年前即ち和銅三年行基菩薩の作にして古川薬師より遷す相傳ふ大坊日現古川薬師堂の別當と對論せし時互に寺寶を暗して勝負を決す行方彈正是事を聞て臣を遣はして日現を護らしむ別當終に理窮り辞屈す之に依て彈正の臣約の如く二王の像を取て此地に

移すと云ふ

此樓門の建立は慶長十三年徳川二代將軍

秀忠公其乳母正心院の立願に依り之を建

立す當山十四祖日詔上人の代なり



樓門

長榮山の額 太虚庵光悦の筆なり相傳ふ關東三額の一なりと三額と

書院光額門樓



は淺草金龍山上野東叡山又傳ふ長榮の榮字
火を土の如き字に改めしは火難を忌み
し意ありとて今猶は之を用ゆ

額堂 間口八間 十六坪 樓門の左の方にあり

接待所 間口三間半 石階上左の方にあり

石階 九拾六段あり法華經寶塔品最末の偈の九十六字を取りて慶長
年間加藤清正公大堂再建と同時に設築せし所のものにして此經難持
坂と稱す

惣門 高さ二丈一尺あり
下明一丈五尺あり

書院光額門總



元錄年中當山廿二祖日玄上人の建設あり

額は太虛庵光悦の筆本門寺の三字を書す相傳ふ
此額を認めんと欲して長持に三棹程書きしも意
の如きを得ずして遂に終る後門弟子其中より撰
て今の額となすと聞けり通俗一字千字の額と呼
ぶ亦た宜なるかあ

長榮堂

石階の上二王門の前右方にあり長榮大威徳天を安置せり明治廿六年
當山六十六祖日舜上人の代再築す委くは縁記に詳かあり
鬼子母神堂 間口三間半 七坪

樓門の右方にあり享保二年酉水戸中納言綱條卿藤堂和泉守高敏侯建立する所あり元の堂は四方なり寶永年間焼失す鬼子母神十羅利女を安置す厨子は享保二年高敏侯の室再興せり其後文化元年子七月當山四十年祖日性上人の代修復す開山已來の勸請なり

額鬼子母神 後藤文鳳の筆

五重塔 奥行三間 九坪



五重ノ塔

十界曼陀羅を安置す樓門を入り右方森林の邊にありて天空に聳ゆ當山十四祖日詔上人の代慶長十三年徳川二代將軍秀忠公乳母法誠正心院の立願に依て建立せり
台徳國公十五歳の御時乳母法誠正

心院日幸尼當山の 高祖大菩薩に武運長久の祈誓を爲す然るに廿七歳の御時此塔に成らせられ依て此の願解として台徳國公三十歳の御時此塔を建立し玉ふ同慶長十九年寅大地震にて傾きしを台徳國公御應野の節上覽あつて修復を命す此時祖師堂の前にあり其後元録十五年丑二月上旬當山廿二祖日玄上人の代常憲國公より材木二千挺白銀百枚を下與せられ本の地五十八間引離し今の地へ建設す竣功は翌十六年也

鼓樓 奥行二間半 五坪

天保十二年雜司谷感應寺廢寺の際當山へ迂すと云ふ

水屋右同斷

大黒堂 奥行三間半 七坪

大黒福壽天を勸請せし祖師堂の前鼓樓の傍にあり當山三十三祖日諫

上人の代天明八年の創立あり神體は 高祖の御作にて靈驗新あり相傳ふ小網町某家にありしを納めしものにて模像は狩野治部法眼永惠あり

額大黒天 三井某氏筆

松化石 祖師堂の前偃蓋蒼松の下にあり

下乗楓 經藏の前にあり 下乗杭は文久二年十月深徳院殿百五

爵金櫻 客殿の前にあり

出仕門 玄關の前當山廿六祖日芳上人の設立あり

中門 客殿の前六脚門又赤門と云ふ二間に壹丈當山廿四祖日等上人

の代享保五年の建設なり

本院 元と方丈と呼ぶ當山十二祖日愷上人天正十

客殿 間口十六間 奥行十二間 百九十二坪

本尊寶塔中題目釋迦多寶本化四菩薩迹化四菩薩四天王等十界の像を安置す中門を入り正面より當山十二祖日愷上人勸めて建立なし元和五年焼失し寛永年間加能越三州の太守利家卿の側室壽福院華嶽日榮夫人の建立あり更に正徳二辰年當山廿三祖日潤上人の再建より現今に至る

涌現

額當山六十世

日蓮上人の筆

清淨地

從三位伯爵

勝安房公の筆

徳川家達公位牌所 徳川茂承公位牌所

間口六間半 間口四間半

延享二年八月將軍吉宗公の建立なり



大書院文殿
 大衆間 奥行三間
 中庸觀 奥行九間 當山六十五祖日薩上人の代再建す觀内唐紙山水の
 圖波山の筆、欄間彫、舟月額、中庸觀智徳院の筆

松平頼英公位牌所 奥行二間
 月牌所 奥行三間
 大書院 奥行五八間
 小書院 奥行三五間
 大小兩書院正徳年間徳川八代將軍吉宗公の寄附に依り新築せり大岡越前守此時の普請奉行なりと兩書院床間張壁等の畫は狩野永恵の筆なり中にも名高きは八方睨の處なり

奥座敷 奥行九間 當山六十五祖日薩上人の代再建せり
 庫裏 奥行十五間 嘉永年間當山五十四祖日英上人の代再建せり
 表廊下 奥行六間 同斷
 角部屋 奥行四間半 同斷
 内廊下 奥行十二間 安政年間當山五十四祖日探上人の代再築せり
 臺所 奥行九間
 應接所
 玄關
 土藏 奥行三間 延享二年徳川八代將軍吉宗公の建築なり
 寶藏 奥行三間 此内に寺寶納る享保十九年寅當山廿五祖日顯上人の代に再建す
 御眞骨堂 客殿の西北にあり 高祖大士の御骨を安す

鐘樓堂 間口二間 客殿の前にあり明治廿四年當山六十六祖日舜上人の代改築せり
 高祖日蓮大士茶毘所 客殿の西山際にあり今其舊跡に一基の塔を建



多宝塔

て多宝塔と云ふ此直徑三間の圓塔なり天保元年江戸茅場町永岡恭重再建す當山四十七祖日教上人の代

第六項

寺寶 數百種の内其の著明なるを掲げて餘は畧す

- 一曼陀羅九幅 高祖日蓮大士御真跡
- 一揚枝曼陀羅一幅 高祖日蓮大士御真跡

緣記曰く高祖佐州左邊の時風波船を覆さんこす此時揚枝を以て是の守を書き帆柱に張りしかば波靜ふり後明師論居を訪ひ奉りし時賜りしと

- 一注法華經四卷 高祖日蓮大士弘安元年戊寅實徒弟の望にまかせて撰述あり私集最要文と題せらる入滅の後日昭へ賜ふ由後人注法華經華と号くる 高祖の真跡自注せられしものなり因記す文殊の頃當山十二祖日愷上人上梓して十卷とす云

- 一高祖御消息七通
- 一法華經一部一卷 高祖日蓮大士御真跡
- 一高祖遺物目錄簿一冊 弘安五年十月高祖入滅の頃徒弟及び檀那へ贈り玉ふ遺物の目錄にして則ち高祖大士の御真跡あり
- 一本理大綱集一卷 高祖日蓮大士御真跡

- 一 法華經三都要文一卷 高祖日蓮大士御真跡
- 一 高祖御念珠一連
- 一 高祖御肉牙二枚 昭師へ授與し玉ふ所なり高祖の御讓狀昭師の添狀あり
- 一 高祖御遺骨一甕
- 一 高祖御灰身一壺
- 一 釋尊御名號 後水尾天皇御真跡
- 一 慶壽 花山天皇御真跡
- 一 法華經一軸 傳教大師御筆
- 一 薄墨之御繪旨
- 一 多寶塔書曼陀羅 狩野古法眼筆
- 一 自讚自畫 定家郷筆
- 一 德川八代將軍御白書院獨禮之記一卷

- 一 座像釋尊赤旂檀也 傳曰く加藤清正公朝鮮征伐の禰將來する所と
- 一 繪像釋尊 張思恭之筆
- 一 繪像普賢 同筆
- 一 正宗作太刀 池上宗仲寄進
- 一 行平作太刀 紀州真性院殿納之
- 一 長船作小刀 高祖日蓮大士護刀
- 一 長船作小刀 松平周防守御母淨心院殿納之
- 一 佛舍利厨子人
- 一 十炷香 德川家茂公母堂實成院納之
- 一 中御門帝 人皇百十五代 御繪旨

享保十年十二月
等師勅賜永紫衣

武藏國池上本門寺爲住持輩代々着紫衣令參內宣奉祈國家安全寶祚

長久者天氣如此悉之以狀

享保十年十二月三日

右大辨花押

一東照宮御判物慶長三戊年 〔但し妙本寺の分は永登〕
〔實貳百文にて同文なり〕

武藏國荏原郡池上郷内百石事

右如先規爲不入領掌畢者守宗門之規矩修理勤行不可有怠慢者也仍
如件

慶長三戊年二月廿四日

内大臣御書判

本門寺

妙本寺

一 台徳院様御朱印元和三年三月 〔以下代々是例に依る〕

當寺領武藏國荏原郡池上郷之百石事

任慶長三年二月廿四日先判之旨永不可有相違之狀如件

元和三年三月廿七日

御朱印

本門寺

妙本寺

一 東照宮御書翰天正十八庚寅年小田原御在
陳の時日怪上人へ被下之

當表在陳爲届使僧殊禱貳端到來祝着候猶全阿彌可申候謹言

三月三日

御書判

本門寺

妙本寺

一 台徳公御書翰元和元年乙卯日詔上人へ被下之

爲見廻遠路預御使僧候並一種貴札令到來祝着ニ存候所勞彌本復
候之間可御心安候尙大久保治部少輔可申候恐々謹言

六月廿日

秀忠御書判

本門寺
妙本寺

第七項

塔中

當山の子院往昔三十六宇又は二十坊あり舊記に載る所六老僧舊跡或は中老僧栖居の處少からずとせず況んや朗師三十七年在住の際門弟九老僧其外老僧等追隨する者も亦各棲居を構ふに於てをや故に今の坊中皆其の法裔を傳ふ世換り歳移り或は所を替へ或は名を改むるあり殊に數回の火災に遭て恢復の功全からず或は二ヶ寺を合して一院とし又は其儘に絶へたるもあり或は中興の師を記して開祖を記さるあり其の九老中老等の舊跡と稱するも皆に口碑に傳るのみて何れか其眞蹟たるを詳にせず今は只現今顯著あるものを記して不明了の

分は其中興する者を以て且く開祖とす維新已後支院十八箇院現存せり

當山の法式塔中の象徒年藤座配にて坊号院号等の位階あり聞く古へは寺号を呼ばずして各其衆分の名を用ゆ故に院と衆との号混雜して何れか實の寺号と云ふことを辨し難し依て今舊名を註するは正徳年中記せる所隨ふ今書する所享保以來定むる所に依り當今専ら唱る所に從ふ大坊照榮院理境院を三院家とす其餘年藤座配にて坊号より院号に進む又古老を兩頭とす永壽院南之院天保二年正月當山四十七祖日教上人御代聖跡法類相續免許とあり兩頭次第に相定る三院家の次第開基の人に依るときは照榮院理境院大坊と次第すべきを今大坊照榮院と次第するは大坊は高祖入滅の靈蹟且つ大檀那宗仲の舊邸あり殊に日澄上人謙讓にして志操高く實に本化の宗を扶翼し本門寺を補佐すべき才徳ありしを以て宗仲信して家を供し且つ又朗師輪師

も輕ト玉はず朗師在倉のときは獨り本門寺を守護せり爰を以て第一
とす照榮院は朗師所棲の地なれば第二とす理境院は輪師の草菴なれ
ば第三とす其外坊中は年藤座配にして次第を定むと云ふ

大坊 本朝三大坊の一員ありと三大坊
には叡山と高野山と池上となり

由緒

長崇山本行寺と稱す池上右衛門大夫宗仲の舊宅にして高祖入滅の
舊跡なり昔康元の頃宗仲鎌倉に於て高祖の檀那と成り文應の頃
高祖此地に來臨在て入滅の地ならんことを約し文永年間本門寺造立
あし後弘安五年九月十八日宗仲が屋敷即ち當院へ入山せらる一日宗
仲高祖に申さく抑建長の始より今日に至までも一切衆生の盲昧を
開かしめんとて大小數度の危難を蒙り未だ暫も止息し玉ふ所なし乍
然御生涯の御願満足して宗弘の免狀を得功成名遂て入滅あらん事凡

慮の測所にあらず庶幾は末世難化の衆生利益の爲御願圓滿の尊像を
刻彫し奉り在が如く日夜不息精勤給仕し奉り身終まで信敬して二世
の大願満足を祈奉らんと欲す然ども聖容を摸奉んこと愚凡の可恐所
なりと涙を流てありければ高祖願宗仲が妻の鏡を取寄玉ひ傍に建
させ御自像御彫刻あらせられ宗仲時々御側に伺候して眞似不似を述
べ高祖御經の間に御彫刻在て自開眼なして之を授け玉ふ自鏡
滿願の靈像とは是あり高祖滅後何事も此像の前にて評定し御一周
忌の節此尊像の前にて御弟子檀那集會して初て會式を修し諸所の御
妙判を結集し玉ふ其後日明菩薩より弟子日澄上人へ附屬して以て今
に至る傍に建置柱は宗仲書院の床柱あり高祖御來臨亦安國論講釋
の節寄かゝらせ玉ふ故御頸御垢染有て永祿九年當院焼亡れ節も不思
議に燒残り能痛所の病に利益在故干今安置し奉りて御寄掛柱と稱す

亦不燒の御柱と號そ
 御硯井は 高祖曼茶羅を圖し玉時水を清淨にあらしめんとて妙符を
 認納玉ふ井にし眼病等消毒の利益あり傍の祖師堂は着着の高祖と
 稱して御入山の時の御姿にて則御經執御杖を曳玉ふ又會式櫻あり弘
 安五年十月十三日 高祖入滅の折柄燦燦として花開き不思議の瑞を
 呈せしと云ふ會式には各地とも必ず櫻花を用ゆる事此の因縁を以て
 なり今に至て毎年會式には美事に花咲き出づ拜觀するもの奇異の思
 ひあらざるなし

額
 大坊坂 本院の右の坂あり大坊へ通る路なり
 車坂 經藏背後の坂なり明治廿五年大に修
 紅葉坂 祖師堂の背後の坂なり



南谷妙見堂

敬見大菩薩

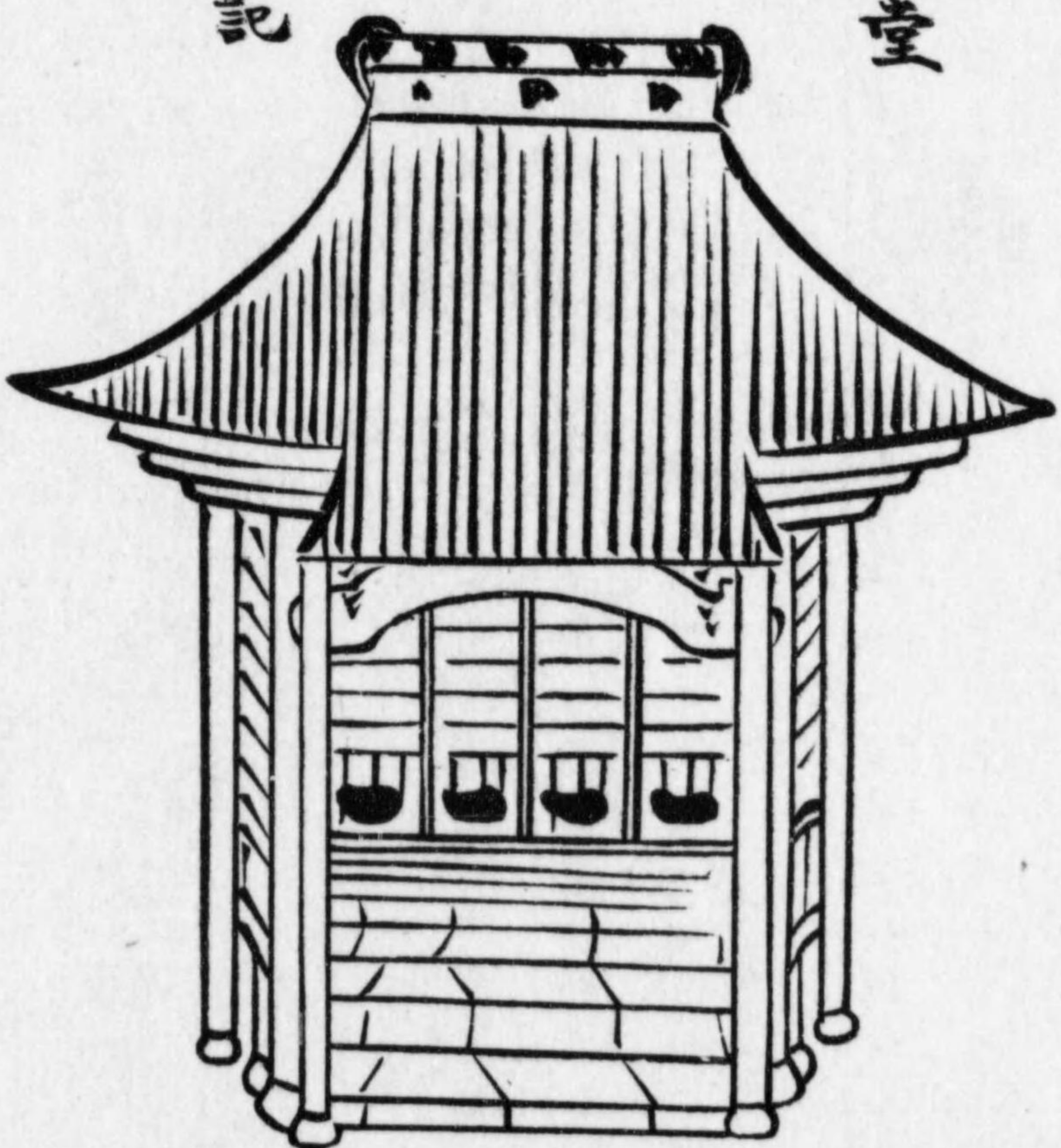
顔面ノ筆者
寶名雖不彰

高僧依命記

日本三跡世尊

寺殿末流

大角圓頓
六十六歲記



照榮院

由緒

朗慶山立善講寺と稱す日朗上人棲神の庵にして正應四年の創立なり
 元應二年申庚孟春入寂の後六十年餘殆んど廢絶す然るに嘉慶年中日鏡
 上人靈跡の現没せん事を慨嘆し再び草廬を興して日朗上人を開祖と
 す其後本山本門寺二十二祖日玄上人元祿二年四月鎌倉比企谷寶篋檀
 林を此地に移して南谷檀林と稱す此地古へ寺窟と云ふ當院代々住職檀林能
 化の職を兼ね維新の後諸檀林を廢し更に大中教院を設けて學徒を教
 育も余後院家職のみを勤む維新後立善講寺は埼玉縣舊引又町
 鎮守堂 妙見大士を安置す紀伊國大守亞相頼宣郷の現安後善れ爲に
 之を造立せり

朗師坂 長榮堂の背後照榮院へ通ふ坂なり相傳ふ朗師寺窪今の南谷

に幽栖の間日々此坂より参堂すと云ふ
朗師松 全坂の傍にありと相傳ふ朗師存生れ時手から栽玉を松なり
享保己後迄ありしが枯れぬ

理境院

由緒

舊名久成院妙祐山崇安寺と稱す本山本門寺三祖日輪上人の坊蹟あり
院家第三の席に列す延寶年中檀越長澤氏の母法号理境院妙淨日貞田
地を寄附そ故に日貞を中興開基とし其法号を因て理境院と改むと云
ふ大黒天の像を安す寸五分
高祖の御自作自開眼にして開基日輪上人の感得なりと云ふ寛保年間
別社を創設し遷座し奉る今の大黒堂是あり

中道院

不二庵とも号す舊名中之坊六老第五頂師の房跡あり當院二世日杉師
は本山本門寺二祖輪師の弟子全七世中道院日陽師住してより中道院
と稱す舊と南の谷の先きに在り後今の地に移す本山本門寺廿五祖願
師已來法類出身の貫主隱栖の所とあし代々位牌及び先哲の靈を安す
今の庫裏は文久二年英師の再建なり

妙玄院

由緒

開祖日等上人享保元年本山本門寺廿四祖の貫首となり祖師堂を再建
せり享保十年永紫衣を賜はり同十二年十月當院を創立し閑居せられ
同十八年十二月二日寂す享齡八十二歳なり爾來法類出身の貫主隱栖
の所となす

永壽院

由緒

舊と蓮乘院と呼ぶ心性院日遠上人の開基なり戸川肥後守安達郷深く日遠上人を歸依し下屋敷五千坪を寄附し一字を草創せん事を謀り寛永年中當院を創立す戸川肥後守朝鮮征伐の時後遺命して境内に葬る法号不變院覺如日真大居士と稱す同院舊と不變院と號するは之に取るなり蓮乘院の別號は紀伊大納言頼宜郷の實母養珠院殿大野本遠寺紀州養珠寺を御建あつて日遠上人を開祖に請す之に依て日遠上人兩山を弟子東師へ譲られ東師茲に幽栖せしを以てなり紀伊頼宜卿御愛女因州の太守光仲候御室芳心夫人松平氏當院歸依淺からず愛子永壽丸殿多病なるを以て高祖へ除病延壽の立願なし生長の後は出家なさしむべしと御祈願ありしに所願満足して壯健に生長ありしも故ありて果さず依て觀成院日遙を猶子として永壽丸殿の身代りとなし當院へ住

職なさしむ國主當院を待するに家老格を以てし芳心夫人自ら地を境内にトし墓を作り華香料田二十石を寄附す故に寶永以後永壽院と曰ふ戸川肥後守殿を開基檀那とし芳心院殿を中興開基檀那とす其廟今猶在り云ふ其頃五兩資するを以なり
遠師東師の曼陀羅數幅あり遠上を開祖とし日遙を中興とす
南之院

由緒

舊と大成辨院と號す六老第一大成辨阿闍梨日昭上人の庵室なり弘安五年九月身延山より高祖に隨從して來て當院を開創せり爾後朗師鎌倉にて弘通の時代りて本門寺を守らしめたり當院は待野家

西之院

由緒

六老第三日興上人の開基なり舊地は市の倉貴船の社の傍松柏鬱然たるの下蒼海に面するの屋敷なりとあり後に今の地に移す又寛永己後寶樹坊を併せ移す寶樹坊は中老日法上人の庵室あり後に西之院と號せり

嚴定院

由緒

舊と成就坊と稱そ嚴定院日尊上人を開基とあま上人は日朗上人の弟子あり因て嚴定院と號す

覺源院

由緒

當院開基佛乘院日現上人ふえて永正十二年十九歳ふえて西京より來て當院を創立す妙法坊と号す時に大檀那井出十郎左衛門爲成法号正

心院覺源日性の名に依り覺源院と改稱そ日現上人天文十九年本山本門寺十一祖の貫主となり大僧都法印となり

安立院

由緒

舊と上之坊と呼ぶ九老澄師草創の院あり日朗上人を師とそ宗仲大坊を建て澄師を請す澄師本行寺の大事坊へ移りて當院を日恩師に譲ると云ふ

東之院

由緒

舊と辻の坊と云ふ六老第六日持上人の開基あり弘安五年九月高祖に隨従し來て當院を草創そ今に日持屋舖と云ふ天保十二年雜司谷感應寺廢寺の際其餘材を以て今の地に再建することゝあし感應寺住職

日詮師造營を督そ一橋御殿の題目堂と云ふもの即ち是なり
妙教院

由緒

當院往古蓮光坊と稱す中古廢絶す寛保三年妙教日理尼再建せり故に
其名を以て院の號とす

心淨院

由緒

舊名大泉坊九老日輪上人元享年中當院を草創して棲居ま玉ふ後日徳
師聖跡の絶る事を歎き自ら中興して輪師を開基とし自ら第二代とな
ると云ふ

養源寺

由緒

松平右近太夫殿母儀養源院殿の建立なり本山本門寺十八祖日耀上人
を以て開基とす享保四年十一月六日同六年十一月十一日御成の節御
膳所となる初め建立の時公儀へ願ひしに新寺建立は成難きを以て濱
竹村長勝山本成寺を移し養源院の法號に因みて養源寺といふ寺寶
高祖御筆一部一卷細字の法華經あり橋本日勝尼開基同人の丹誠
に由て永續方立つと云ふ

常仙院

由緒

舊と玉藏坊と云ふ本山本門寺九祖日純上人を以て開基とす天文十八
年上人當院を草創して閑居す殆んど仙境に生を養が如く只幽栖して
塵事の遮るなし故に常仙院を命ず相傳御園村月村宗親死して葬送の
途次雷激して死者の右腕を攫取せしとき純師祈念せしに空中に聲あ
つて日純に返すとあり此の奇特の事を聞て遠近より除雷の守を乞ふ

もの日々門前に市をなせり

本妙院

由緒

舊と妙藏坊と稱す九老傳師の舊跡にして西谷にあり元龜四年燒失す
此時本山本門寺十二祖日愷上人用材資金を興へて當院を草創す由て
上人を以て開基とす上人二條關白昭實公の猶子にして徳川家康公と
親み善し慶長三年七月六日寂す享齡四十九歳なり

本成院

由緒

舊名北之坊或は喜多院とも號す六老第五向師の開基なり慶長年中本
山本門寺十三祖日尊上人補理を加へて隱栖す故に日尊上人を以て中
興とす

坂本院

由緒

等覺院と號す九老行師の舊趾なり本山本門寺十九祖日豊上人寛文年
中再興して此れに閑居すと云ふ

大黒菴

由緒

大黒天尊像の背面に法華守護日蓮作の七字を記す 高祖自作自開眼
疑なし此尊像元來理境院に供養せしが寛保年間別社に安置す妙好日
進尼姓は志田氏黒田家に仕へ天保年間両山主日教上人の弟子とあり
今の大黒堂を再建せり委くは縁記に詳なり
惣門内外兩側石垣建築 當山六十六祖日舜上人の新築する所明治廿
六年十月着手せり

第八項

墳墓

高祖 日蓮大士御廟 寶藏の西にあり御廟山と唱ふ御寶塔の首題御名

祖師御廟



判等御眞筆を刻む寶塔の傍に石柱あり

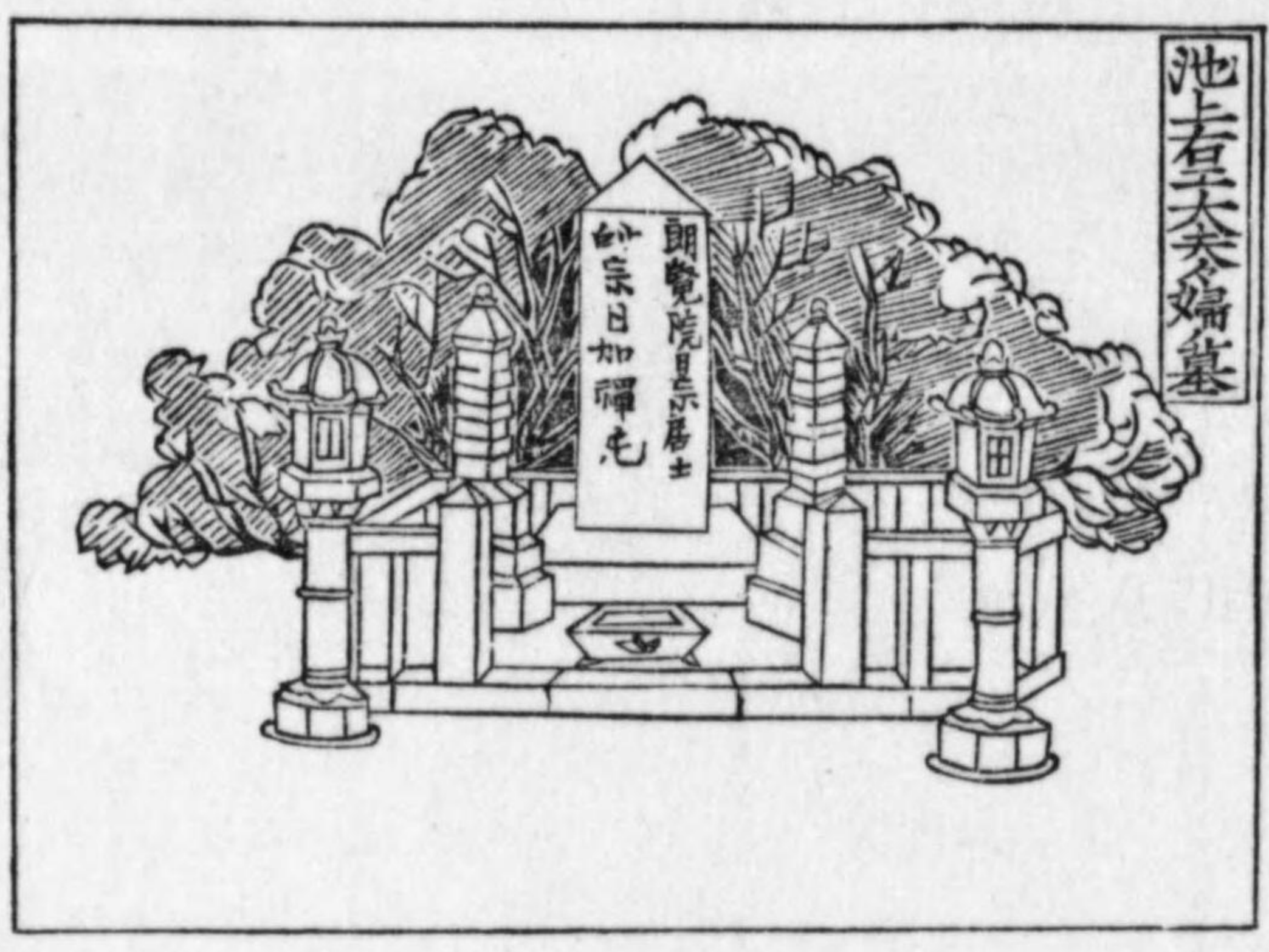
高さ二丈許東の方明治十四年 高祖六百御遠忌の際

廟堂新築す當山六十五祖日舜上人の代

朗師御廟 祖廟の西にあり眞如院日住上人初めて朗師草庵寺窪に御廟を立つ文明六年下關の時朗師の廟を拜す其後享保年中等師今の地に移す

輪師廟 同東の脇ふあり
池上右衛門太夫宗仲夫婦之墓 同東の傍にあり弘安六年九月十三日

池上太夫婦墓



没し其後當山廿五祖日頭上人此塔を改築す法號は日期上人の授くる所なり池上宗仲姓は藤原氏禁闕四部官の一にして建長年間宗尊親王に従ひ來て鎌倉に仕へ邑を池上の地に食む嘗て康元元年八月鎌倉にして高祖の化を尊み檀越となる信力畜ならず宗仲每歳供を身延山に送り參らす書六卷を賜ふ正應元年十月十三日旗曼陀羅記を作る其孫裔大師河原村に住し今に至りて連綿として榮昌せり

一説に曰く宗仲は世の工匠を業とし鎌倉に仕ふるにたり

加藤清正公之墓 清正公大神儀は慶長十六年六月廿四日に没し公の
息女紀州大納言頼宣郷の北方瑤林院殿慶安二年此塔を建て、葬儀を
營む

加藤清正墓



佛已居今釋迦佛並座當來亦然將旃巨表妙經乃是三世諸佛所住之處即
事而眞實相寶塔其在乎斯焉然生佛一如迷悟體一以不二事通不二理其
功豈唐捐哉馮之藤原朝臣加藤肥後太守淨池院殿日乘精神之息女紀州

碑銘曰夫偷波者實相之境法身所依
之處妙經之體秘要之藏是肆經曰佛
三種身從此經生諸佛於此而道場諸
佛於此而轉法輪諸佛於此而般涅槃
只法華即是三世諸佛生處得道轉法
輪入滅之四種支微絲茲今塔先多寶

太源大納言郷頼宣公之北方瑤林院殿淨秀日芳大姊營建茲塔以贈亡父
日乘精靈增進菩提追薦資糧償余幽神佛智彌增佛界彌進宛如觀掌焉乃
至一見一禮永離惡道六趣四生齊稟巨益御兜前物立御鏡御所持
軍配圖扇廟中石函藏之

峯慶安二歲龍集丑林鐘中潮之四 圖是院日耀誌之

清正公妃之墓 法號正應院祐眞日行肥後守忠廣公の御母なり寛永三
年自ら建設す 所の塔なり

養珠院妙紹日心大姊之墓 徳川家康公紀州大納言頼宣郷の母なり承
應二年八月廿一日葬る

瑤林院淨秀日芳大姊之墓 紀州大納言頼宣郷の妃加藤清正公の息女
なり寛文六年正月廿四日葬る

深徳院殿妙順日喜大禪尼之墓 徳川八代將軍吉宗公の御母堂なり正
徳三年十月廿四日當山お葬る

寬德院玄真日中大姊之墓 伏見親王之姫君にして前紀州大納言吉宗
 公の妃なり 寶永七年六月四日當山に葬る
 壽福夫人之墓 加越能太守利家公の側室なり
 狩野古法眼元信之墓 永祿二年十月六日當山に葬る
 狩野探幽之墓 延寶二年十月七日當山に葬る

法卯探幽齋狩野守信碑誌並銘

延寶二年^甲十月七日法卯探幽齋狩野守信病而沒于家壽七十三葬池上
 本門寺明年^己卯小祥忌其子探信探雪不耐悲慕立碑墓畔而請於弘文院學
 士林叟叟末成童時知探幽於京師之宅東來之後或遇於營中或會於候伯
 家晤語頻々既永訣豈不哀惜之哉乃據家爲之作辭曰夫名一藝稱圖國無
 敵者不亦艱乎狩野探幽齋野氏之先出自藤氏南家之支流遠江助爲憲其
 孫維景住伊豆國号狩野介傳至茂光宗光仕鎌倉幕府授葉連綿其末裔祐

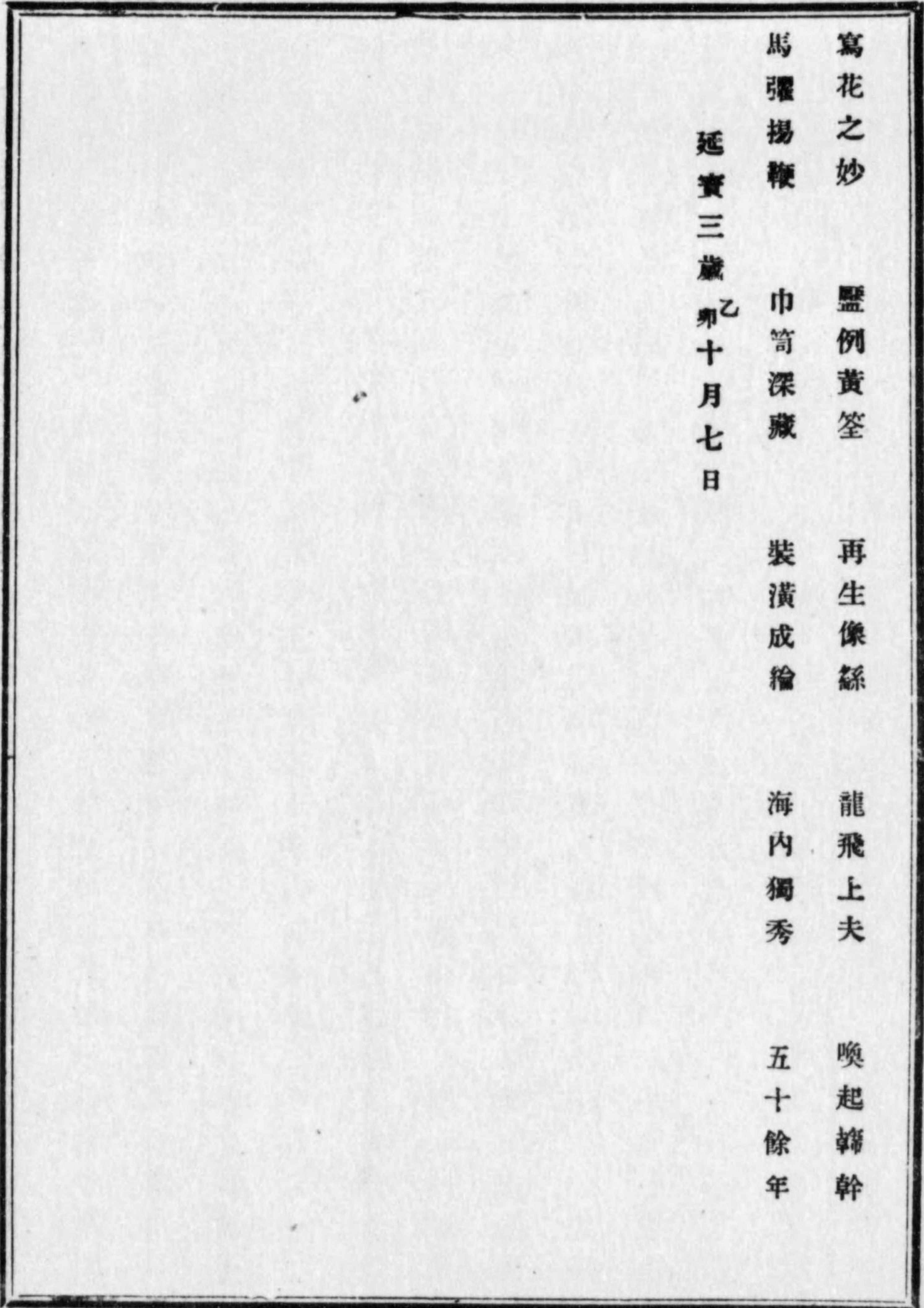
清自豆州移京都陪足利幕府時左僕射源義政辭職閑居東山使祐清監畫
 圖事性癖好設色遂得其名剃髮叙法眼位以繪爲業祐清子元信益聲價其
 子祐雪祐雪子松榮亦叙法眼世傳家業俗稱元信曰古法眼珍藏其所圖松
 葉生永德其技亞元信進叙法卯有二男伯曰光信叔曰孝信乃是探幽齋守
 信父也守信以慶長七年^{壬寅}其月其日產於京師母者佐々成政娘也云二歲
 時孝信戲授筆其泣忽止屢試之每皆然見者異是四歲自執筆持墨其圖殆
 如習熟者云十七年^{壬子}守信如東行到駿府奉拜 東照宮大神君而後趣江
 府奉拜 台德公十三歲時畫猫於海堂花下殆疑爲 永德迄十五歲畫龍
 於紅葉山 神廟爾來日光山三綠山東叡山宮廟有經營則圖龍爲例元和
 己^丁 台德公御覽諸畫工所圖守信筆勢殊協 旨爲宦物時十六歲既得群
 之譽九年^{癸亥}書於難波城殿屋自比以降江城改造無不蕭索卯寬永三年^{丙寅}
 行幸二條城其儲御所高壁命守信畫之監司堀氏爲之連設重架故殿內不

明碑於運筆守信乃徹其架結構集箸於筆守信乃徹其架結構焦箸於筆頭
 運足之間縱橫自在假點画而脩飾之不日亟成僉曰實非尋常画者所及也
 時二十五歲聲名藉甚十三年^丙奉大猷公釣命圖東照宮綠起殊有
 旨薙髮叔法眼改守信号探幽齋辱奉寫神影自比齊名行蒙繪所號時三
 十五歲也十九年^壬禁裡造改探幽圖紫震殿賢聖障子此是自巨勢金闕以
 來歷朝殊精選所也此後皇居改營二度探幽皆勤之且仙院長信官亦
 無不預後直尔每有朝鮮國信使來貢蒙命圖屏風報彼國王之聘信使留館
 之間屢往走筆彼画工其寫生傳神之逼真無不嘆服其進士請以描己像自
 珍曰其國未嘗見如此之妙技化僧隱元曰中朝亦如斯藝者可稀乎乃匪啻
 卓立我邦其稱於異城亦大矣乃今大君幕下治世其墨痕入英覽而蒙
 感賞者數矣寬文二^壬寅歲屏進法卯是年亦務省中仙院之繪事時太上
 法皇賜畫筆其後明曆上皇亦賜奎朝傳家至寶何以加焉四歲^甲辰季冬

始於河內國賜采地二百達藝無雙之効於此彌顯矣凡探幽畫幅無貴無賤
 競求藏貯或掛床壁或為席珍遍於闔國其價抵金玉自幼弱留心家藝每日
 古画不限和漢悉皆摸之經過勝境則為之少留熟視其氣象認得於心而去
 又聞珍禽奇獸在其所則自往寫之至花草異品亦然故画品式樣積蓋如丘
 試傲膽古來名畫則殆與真侔矣常自談曰曾夢馬遠談山水畫法自以覺筆
 力之近其徒有言曰古者画師各有所長亦有所短如探幽則人物山川草木
 鳥獸等諸品皆無不得意畫鼠猫來窺畫菊則蝶舞畫鷺則其類集下至繪大
 龍點其睛必致雷雨可謂得心乎通神之明也齡古稀罹病起居不快右手痛
 痺然勉強乘筆其藝益精至此聞訃者曰嗚呼昔鍾期玄而伯牙絕絃獻之沒
 而人琴俱亡今於斯人謂人畫俱亡乎詞既成保之以銘銘曰
 傳藝奕葉 立門惟專 幼齡卓異 工夫覃研 思寓物外
 意在筆前 無聲以靜 有象而速 圖山之絕 超越鄭震

寫花之妙 鑿例黃筌 再生像絲 龍飛上夫 喚起韓幹
 馬彊揚鞭 巾笥深藏 裝潢成繪 海內獨秀 五十餘年

延寶三歲^乙卯十月七日



明治廿九年十月七日印刷
 明治廿九年十月十日發行

東京府下荏原郡池上村
 下池上第三百四十九番地
 本成院住職

編輯 兼 富 永 潮 樹
 行輯 人

印刷 人 橫濱市松ヶ枝町廿五番地
 一ノ瀬 善 次

印刷 所 橫濱市松ヶ枝町廿五番地
 鈴木 活 版 所

